

19A 加減涼膈散(浅田)

参考文献名	連翹	黄芩	山梔子	桔梗	黄連	薄荷	薄荷葉	当归	生地黄	地黄	枳殼	枳実	芍薬	甘草	大黄	石膏	用法・用量
漢方処方応用の実際 注1	3	3	2	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	1 (適量)	4	

注1

- ・体力が普通以上に充実し、胃、食道に炎症があつて、口腔内や舌に潰瘍を生ずるものである。
- ・勿誤薬室方函口訣には、以上の諸薬に、桔梗、防風、菊花、木通、車前子各2.0を加え、眼疾によいともある。
- ・勿誤薬室方函口訣によれば、この処方は膈熱(胃の上部や食道の熱)による諸病によく、瀉心湯類に似たものだとある。

しかしこの処方に梔子があるので、むしろ三黄瀉心湯と黄連解毒湯を兼ねたようなものと考えられる。

- ・口内炎、アフター性口内炎、舌炎、胃炎、食道の炎症、その他

処方番号：20

処方名：藿香正気散（かっこうしょうきさん）

処方構成：

白朮 3、茯苓 3、陳皮 2、白芷 1-1.5、藿香 1、大棗 1-2、甘草 1、半夏 3、厚朴 2、桔梗 1.5、蘇葉 1、大腹皮 1、生姜 1

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度かやや虚弱なものの次の諸症

効能・効果：

感冒、暑さによる食欲不振、急性胃腸炎、下痢、全身倦怠

原典：太平惠民和劑局方

出典：

解説：

夏期の感冒や食あたりによる発熱、下痢、嘔吐、あるいは消化器型感冒による発熱、下痢、嘔吐に使用する。特に夏に使用が多い。

20. 藿香正気散

参考文献名		白朮	半夏	茯苓	厚朴	陳皮	桔梗	白芷	紫蘇葉	藿香	大腹皮	大棗	乾生姜	甘草
診療医典	注1	3	3	3	2	2	1.5	1	1	1	1	2	生姜2	1
処方解説	注2	3	3	3	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	1	1
要方解説	注3	3	3	3	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	生姜1	1
診療の実際	注4	3	3	3	2	2	1.5	1	1	1	1	2	生姜2	1
処方集	注5	3	3	4	3	3	3	4	4	4	4	3	生姜3	1.5
民間薬百科	注6	3	3	3	2	2	1.5	1	1.5	1	-	2	生姜2	1
処方分量集		3	3	3	2	2	1.5	1	1	1	1	2	1	1

〔注1〕 本方は消導の劑に屬し、内傷と外傷とを兼治し、發散の効力がある。多く夏季に用いられ、内は生冷に傷られ、外は暑湿に感じ、胃腸内に宿食、停水があり・そのため腹痛、下痢、嘔吐、心下痞え、頭痛、發熱、などがあって汗のないものに用いられる。よく暑と湿とを發散し、停水、宿食を消導する効がある。これらの諸症がなくても、夏季に常用して胃腸を調べ、身心を輕快ならしめる効果がある。一方、食滯による小児の暁方の咳嗽、眼疾、齒痛などに転用され、また青年性疣贅の顔面に多発するものに薏苡仁を加えて用いる。以上の目標にしたがって、夏季の感冒、中暑、夏季の急性胃腸カタル、小児の食滯による咳嗽および疣贅などに応用される。

〔注2〕 内傷と外感とを兼ねたのが目的で、外は夏季の風寒（冷房・扇風器なども含めて）に傷られ、内は生冷の飲食によって傷害され、食毒・水毒等のため頭痛・發熱・心下痞え、嘔吐・下痢・心腹疼痛を發し、汗なく脈腹ともに力あるものを目標とする。

あまり虚証でない體質者の中暑、または夏季の胃腸カタルなどに用いる。すなわち本方は主として夏の感冒・暑さあたり・吐き下し・暑さ負け・急性胃腸炎・夏の下痢症等に用いられ、また婦人の産前産後の神経性腹痛・小児の食滯による咳嗽・眼疾・齒痛・咽痛に用いられ疣には薏苡仁を大量に加えて応用される。

〔注3〕 この方は内傷と外感とを兼治し、發散の力がある。夏月に多く、内生冷に傷られ、外暑湿に感じ、胃腸内に食毒、水毒滞り、ために腹痛下痢、嘔吐、心下痞え、頭痛發熱して汗なきものによい。食滯による小児の暁方の咳嗽、眼疾、牙痛、少年性疣(顔面手足に多発する)に転用される。

①夏月の感冒 ②暑さ中り ③急性胃腸炎 ④小児の食滯咳嗽 ⑤疣(薏苡仁を大量加える)に應用される。

〔注4〕 は〔注1〕 と同文。

〔注5〕 發熱頭痛惡寒あるいは嘔吐下痢腹痛を目標とし、感冒その他の急性熱病、急性胃腸炎に用いられる。

〔注6〕 夏季に冷たいものを飲んで胃腸をこわしたり、子どもの寝冷え、または、ルームクーラによる感冒様状態などを目標とし夏季の感冒、中暑、夏季の急性胃腸炎に應用される。

処方番号：21

処方名：葛根黄連黄芩湯（かっこんうれんおうごんとう）

処方構成：

葛根 5-6、黄連 3、黄芩 3、甘草 2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度のものの次の諸症

効能・効果：

下痢、急性胃腸炎、口内炎、舌炎、肩こり、不眠

原典：傷寒論

出典：

解説：

熱があつて下痢し、首すじや肩がこり、みぞおちがつかえ、発汗、喘鳴するような場合に用いる。

21.葛根黄連黄芩湯

参考文献名		葛根	黄連	黄芩	甘草
傷寒論 太陽病中編	注1	半斤	3兩	2兩	2兩
診療医典	注2	6	3	3	2
症候別治療	注3	6	3	3	2
応用の実際	注4	5	3	3	2
処方解説	注5	6	3	3	2
漢方あれこれ	注6	6	3	3	2

〔注1〕 太陽病：桂枝証，医反下之，利遂不止，脈促者，表未解也，喘而汗出者主之。右四味，以水八升，先煮葛根，減三升，内諸藥，煮取二升，去滓，分温再服。

〔注2〕 本方は三黄瀉心湯中の大黃の代りに葛根と甘草を入れた方であるから、三黄瀉心湯証に似ていて、表熱証があり、裏実の候のないものに用いる。そこで「傷寒論」に「太陽病の桂枝湯を証を誤って医者が下したために、下痢が止まず、脈が促であるものは、表証がまだ残っている。このような患者で、喘鳴があって汗が出るものは葛根黄連黄芩湯の主治である」という条文によって、急性胃腸炎、疫痢、胃腸型の流感などに用いるばかりでなく、肩こり、高血圧症、口内炎、舌炎、不眠などにも用いる。

〔注3〕 二日酔で、嘔吐するものには、五苓散や順気和中湯がよくきくが、嘔吐、下痢があり、また心下部の痛むものには、この方よくきく場合がある。疫痢で高熱が出て、下痢とともに痙攣を發する場合に用いる。

〔注4〕 熱のある下痢の初期に用いる。このとき、項背がこわばり、心下が痞える。勿誤藥室方函口訣には、小児の下痢によく用いられるとある。また汗が出て、喘鳴を發することもある。

〔注5〕 原本には葛根を先に煮ることになっている。普通は一緒に煮て用いている。裏の熱がはなはだしく、表熱もあり、表裏の鬱熱によって心下が痞えて下痢し、喘して汗が出、心中悸等の症あるものに用いる。

〔注6〕 ハシカ：高熱を出し、セキをして下痢気味のときは葛根黄連黄芩湯を用いる。

処方番号：22

処方名：葛根紅花湯（かっこんこうかとう）

処方構成：

葛根 3、芍薬 3、地黄 3、黄連 1.5、山梔子 1.5、紅花 1、大黄 0.5-1、甘草 1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上で便秘傾向のもの次の諸症

効能・効果：

あかはな、しみ

原典：方輿輓

出典：

解説：

あかはなという特殊用途の専門薬であり、長期連用しなければならない。

22. 葛根紅花湯

参考文献名		葛根	芍薬	地黄	黄連	山梔子	紅花	大黃	甘草
方輿輓	注1	1錢	1錢	1錢*	1錢	1錢	1錢	1錢	3分
診療医典	注2	3	3	3	1.5	1.5	1.5	1	1
症候別治療		3	3	3	1.5	1.5	1.5	1	1
処方解説	注3	3	3	3	1.5	1.5	1.5	1	1

* 生地黃

〔注1〕 療酒查鼻劇症。右八味，以水四合，煮取二合，澆再似四合，煮取一合半，日二劑，服湯數日，覺患所痛痒，則將四物硫黃散，擦鼻上，當大熱發，此毒欲尽也，熱

既發之後外擦則須止，内服不須止也，若病輕者，小劑減水，不用外擦藥。

〔注2〕 酒皰：頭部，顔面の充血，血管神經異常などによって発生したものには，一般に本方が用いられる。しかし短時日で全治するわけにはゆかないから，永く続ける必要がある。

〔注3〕 「酒查鼻の劇証を療す」強度のものには本方を服用し，かつ四物硫黃散を外用するという。中等または軽度ものは本方を連用するがよい。また刺絡により悪血をとる。黄連解毒湯を長服するもよい。酒查鼻(あかはな)専門の薬方である。

処方番号：23

処方名：葛根湯（かっこんとう）

処方構成：

葛根 4、麻黄 3、大棗 3、桂枝 2、芍薬 2、甘草 2、生姜 1、
又は葛根 8、麻黄 4、大棗 4、桂枝 3、芍薬 3、甘草 2、生姜 1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：

感冒の初期（汗をかいていないもの）、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛み

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

桂枝湯に葛根と麻黄を加えたものである。用法は体表が突っていて汗ばむことがなく、悪寒、発熱、頭痛がして、くびすじや背中のこわばるもの、また体表部の限局性のこわばりを感じるもの、発熱悪寒がなくても前記症状のあるものに広く用いる。ただし胃腸の虚弱な人、食欲不振、嘔吐、悪心、のある人には用いないほうがよい。感冒の場合は温かい湯で服用し、その後は保温に努める。

『方函類聚』に「治外感之項背強急、又蒼朮附子ヲ加テ肩臂痛ヲ治ス、また川芎大黃ヲ加エテ腦漏及眼耳痛ニ宜シ、又荊芥大黃ヲ加テ疔瘡微毒ヲ治ス」とある（脳漏＝蓄膿症、疔瘡＝硬、軟性下疳、陰頭癰、等）。

23. 葛根湯

参考文献名	葛根	麻黄	大棗	桂枝	芍薬	甘草	乾生姜	生姜	用法・用量
処方分量集	8	4	4	3	3	2	1	-	
診療の実際 注1	8	4	4	3	3	2	-	4	
診療医典 注2	8	4	4	3	3	2	-	4	
症候別治療	8	4	4	3	3	2	-	4	
処方解説 注3	8	4	4	3	3	2	1	-	*1
応用の実際	4	3	3	2	2	2	-	3	
明解処方	4	4	3	2	2	2	1	-	
漢方処方集	4	3	3	2	2	2	1	-	
基礎と診療	4	3	3	2	2	2	-	3	
実用漢方療法	6	4	4	3	3	2	-	4	
診かた治しかた	8	4	4	3	3	2	-	4	
漢方入門	4	4	3	2	2	2	-	3	*2

*1 原典には葛根と麻黄を先に煮るとしてある。一般には一緒に煎じている。

*2 水400ccを以って葛根、麻黄、を煮て80ccを減じ白沫を去り他の諸薬を加えて再び煮て。120ccに煮つめ、滓を去り3回に分服。

〔注1〕 本方を感冒に应用するには、太陽病で次の症候複合のあるものを目標とする。すなわち、悪寒発熱、脈は浮いて触れ易く緊張し、項部、肩背部の緊張感等のある者である。この場合の悪感は何時も身体がゾクゾクと寒気を覚えるものを指示。

〔注2〕 感冒の薬として有名であるが、感冒に限らず、発熱悪寒のある場合に、脈が浮で力があり、項背部に緊張感のあるものに用いる。発熱、悪寒のない場合でも脈浮にして力があり、項背部に緊張感のあるものに用いる。

〔注3〕 体表が実して、その症状が項背部の緊張として現われる場合と、体表部に限局性の緊張として現われる場合とがある。また発熱をとまなうときと、熱のないときとがある。

傷寒論(太陽病中篇)に「太陽病、項背強バ(僧帽筋領域の緊張)コト几々(机の角のごとくこわばる形容、短羽、の鳥の頸がこわばる貌)、汗無く悪風スルモノ葛根湯之ヲ主ル」「太陽ト陽明ノ合病者ハ必ず自下利ス、葛根湯之ヲ主ル」とあり、金匱要略(痙湿喝病門)に、「太陽病、汗ナクシテ小便反ッテ少ク、気胸ニ上衝シ、口噤(牙関緊急)語ルコトヲ得ズ、剛痙(破傷風あるいは脳膜炎、尿毒症等のときのごとき全身痙攣をさす)ヲナサント欲ス」とある。

勿誤方函口訣には「此方外感ノ項背強急ニ用ルコトハ、五尺ノ童子モ知ルコトナレドモ、古方ノ妙用種々アリテ思議スベカラズ。譬エバ積年肩背ニ凝結アリテ其ノ痛ミ時々心下ニサシコム者、此方ニテー汗スレバ忘ルルガ如シ。……」とある。

処方番号：23A

処方名：葛根湯加川芎辛夷（かっこんとうかせんきゅうしんい）

処方構成：

葛根 4、麻黄 3、大棗 3、桂枝 2、芍薬 2、甘草 2、生姜 1、川芎 2-3、辛夷 2-3、
又は葛根 8、麻黄 4、大棗 4、桂枝 3、芍薬 3、甘草 2、生姜 1、川芎 2-3、辛夷 2-3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：

鼻づまり、蓄膿症、慢性鼻炎

原典：本朝経験方

出典：

解説：

民間薬として鼻づまりや蓄膿症によく使われる辛夷と脳に働き痛みを鎮める作用のある川芎を葛根湯に加味したもので、本来、葛根湯証で鼻づまり、慢性鼻炎のあるものに用いられるが、一般の慢性鼻炎、蓄膿症の漢方製剤としてよく使われている。また現在の成書には川芎、辛夷 2 味だけの加方、および分量の記載がないので辛夷、川芎の量については他方に含有されている辛夷の量等を参考にした。

23A.葛根湯加川芎辛夷

参考文献名	葛根	麻黄	桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草	川芎	辛夷
処方分量集	-	-	-	-	-	-	-	-	-
診療の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	-
診療医典	-	-	-	-	-	-	-	-	-
症候別治療	-	-	-	-	-	-	-	-	-
処方解説 注1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-
応用の実際 注2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明解処方	4	4	2	2	3	1	2	3	3
漢方大医典 注3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方臨床の処方 注4	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注1 辛夷清肺湯に辛夷2.0と記載。

注2 鼻疾患に川芎辛夷を加える。ただ辛夷を加える出典は、はっきりしない、とあり分量の記載なし。

注3 辛夷2.0, 便秘傾向のあるものに川芎2.0。

注4 葛根湯加桔梗石膏辛夷に辛夷3.0。

処方番号：23B

処方名：独活葛根湯（どっかつかつこんとう）

処方構成：

葛根 5、桂枝 3、芍薬 3、麻黄 2、独活 2、生姜 1-2、地黄 4、大棗 1、甘草 1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度か、やや虚弱なものの次の諸症

効能・効果：

四十肩、五十肩、寝違え、肩こり

原典：外台秘要方

出典：

解説：

（1）本方は葛根湯に独活と地黄を加えたものである。（2）『外台秘要』に「柔中風、身体疼痛、四肢緩弱、不随せんと欲するを癒す。産後の柔中風、またこの方を用いる」とある。（3）『病源候論』に「柔中風とは血気ともに虚し風邪並に入り、四肢収ることあたわず、裏急して仰ぐこと能わざるなり」とある。

23B.独活葛根湯

参考文献名	葛根	桂枝	芍薬	麻黄	独活	生姜	地黄	大棗	甘草
処方分量集	5	3	3	2	2	2	4	1	1
後世要方解説 注1	5	3	3	2	2	2	4	1	1
診療医典	5	3	3	2	2	1(乾生姜)	4	1	1
漢方あれこれ	記載なし								
漢方処方集	4	—	—	2	2	1(干姜)	4	2	2

【注1】 (1)柔中風の症，血虚に外感を兼ね，肩背強急し，身体疼痛，四肢不随するものに用いられる。(2)また，臂痛擧急して悪風寒のある場合にも効がある。(3)四十腕，五十肩と称するものに転じて頻用される。(4)四肢疼痛，腦溢血の肩背拘急などに応用する。

処方番号：24

処方名：加味解毒湯（かみげどくとう）

処方構成：

黄連 2、黄芩 2、黄柏 2、山梔子 2、柴胡 2、茵陳蒿 2、竜胆 2、木通 2、滑石 3、升麻 1.5、甘草 1.5、
燈心草 1.5、大黃 1.5 （大黃のない場合も可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以上で、血色がよいものの次の諸症

効能・効果：

小便がしぶって出にくいもの、痔疾（いぼ痔、痔痛、痔出血）

原典：寿世保元

出典：

解説：

この処方は『寿世保元』の「疸（黄疸）門」に記載されている。原典では「発黄症身口俱に金色を發し、小便濃煮拍汁の如しを治す。諸薬が不効に用う。」とあり、黄疸の薬方である。同本の「痔門」にも同名の処方があり、しばしば混同されて使われてきた。どちらも血熱を冷ます黄連解毒湯が基になっている。升麻・柴胡は乙字湯にも使われていて升提作用があることから、脱肛ぎみの人には、痔門の加味解毒湯より本方が使われてきた。

24.加味解毒湯

参考文献名	黄連	黄芩	黄柏	山梔子	柴胡	茵陳	竜胆	木通	滑石	升麻	甘草	燈心草	大黄
処方分量集	2	2	2	2	2	2	2	2	3	1.5	1.5	1.5	1.5
診療の実際	2	2	2	2	2	2	2	2	3	1.5	1.5	1.5	1.5
診療医典	2	2	2	2	2	2	2	2	3	1.5	1.5	1.5	1.5
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
応用の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

処方番号：25

処方名：栝楼薤白白酒湯（かろうがいはいくはくしゅとう）

処方構成：

栝楼実 2-5（栝楼仁も可）、薤白 4-9.6、白酒 140-700（日本酒も可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力に関わらず広く用いられる

効能・効果：

背部に放散する胸部・心下部の痛み、胸部の圧迫感

原典：金匱要略

出典：

解説：

原典では「白酒」で煎じることになっている。「白酒」は濁り酒のことであろうが、酢をあてている本もある。臨床家は一般に日本酒を倍に薄めたものを使っている。酒中のアルコールは煎液にはほとんど残らない。栝楼実にはキカラスウリの実で、その中の種が栝楼仁（局外生規）である。本方に栝楼仁を使うことが多い。

原典である『金匱要略』では「胸痺心痛短気（胸が詰り心が痛み呼吸が促迫）」の項に「胸の中が詰ったように苦しくなり、あるいは胸がしめつけられるように痛くなり、痛みは背中まで放散するもの、息が苦しく、呼吸が促迫し、咳き込み、よだれを出す」と書かれているので、狭心症やその類似の症状に使われている。

一般に、原料の生薬数が少ないほど、急性の症状に使われることが多く、生薬数の多いものほど体質改善など慢性的な目的で使われる。本方は次の栝楼薤白湯に比べて、発作時や急性期に使っている。

25. 栝楼薤白白酒湯

参考文献名	栝 楼 実	薤 白	白 酒	日 本 酒	用法・用量
漢方診療医典	2	6	400		*1
漢方処方応用の実際 注1	2	4	400		*2
金匱要略入門 注2	1個	7.5	700		*3
症候による漢方治療の実際 注3	2	4	400		*4
漢方治療百話 注4	2	6	400		*5
経験漢方処方分量集	2	6	400		*6
改訂新版漢方処方集 注5	4	8		140	*7
新撰類聚方 注6	1枚 (4)	半斤 (8)	7升 (280)		*8
漢方薬入門 注7	2	6	400		
現代漢方入門 注8	-	-	-		
漢方古方要方解説 注9	2.4	9.6	2合1勺 (今、尾台榕堂氏に従 ひ、水1合9勺に米醋2勺 を加へて、之に代ふ)		*9
新古方薬囊 注10	5	8	1合4勺		*10
1000万人の漢方診断と治療の実際 注11	2	6	400		*11
實用漢方療法 注12	2	6	水と酒200ccずつ		*12

*1 白酒400mlに入れ150mlに煎じ1日3回に分服。

*2 白酒400mlに入れ、150mlに煎じ、1日3回に分服。白酒の代用として上等の清酒を用いるがよいというものと、酢を用いるものとある。酢を用いる場合は水400mlに酢40mlを入れる。

*3 以上三味、同時に煮て200銭となし100銭宛温服すること2回せよ。

*4 白酒400mlに入れ、150mlに煎じ、1日3回に分服。白酒の代用として上等の清酒を用いるがよいとする者と、酢を用いるものとある。酢の場合は水400mlの中に酢40mlを入れる。

*5 白酒＝濁醪を用う＝400ccに入れ150ccに煎じ1日量を3回に服す。

*6 白酒(濁酒を用う)400ccに入れ150ccに煎じ1日量を3回に服す。

*7 水を入れずに煮て40に煮つめ2回に分服。

便法: 水100、酒100で煮て100に煮つめ3回に分服。

*8 右三味、同煮取二升、分温再服。

*9 右三味、煮て六勺を取り、滓を去りて1回に温服す(通常1日2、3回)。

*10 右三味を一緒に煮て4勺を取り二回に分けて温服すべし。

*11 白酒400ccにて煎じる。

*12 水と酒200ccずつで半量に煎じ1日2回。

注1

・胸の中がつかまったように苦しくなり、あるいは胸がしめつけられるように痛くなり、痛みは背中まで放散するもの。

・息が苦しく、呼吸が促迫し、咳こみ、よだれを出す。

・胸背痛んで呼吸の苦しいものに用いる。(栝竹楼方函口訣)

・たいがい甚だしい胸痛によい。(栝竹楼方函口訣)

・心臓性喘息、狭心症、心筋梗塞、その他の心臓病

注2

・胸痺の証候複合は、喘息性呼吸、咳嗽喀痰、胸部から背部に放散する疼痛、呼吸息迫、脈は寸口部に於ては沈且つ遅で、関部に於ては小、緊、数である。

・本方は狭心症の証治を論ずる。

・胸痺の総治となす。

注3

- ・心臓性喘息や狭心症などで、呼吸が苦しく、胸から背にかけて痛むものに用いる。
- ・多年喘息を患うものにこの証が多い。或いは労咳と云われて百薬の効のないもの、例えば、大小の青龍湯または麻黄甘草湯或いは葛根湯などの証に似て、これらを用いて効のないものにこの証が多い。(腹証奇覽)
- ・喘息で、せきと痰が出て、胸と背が痛んで、呼吸の促迫するものに用いている。
- ・心臓性喘息や狭心症に用いる。
- ・胸背が痛んで呼吸が困難な者に用いる。(梧竹楼方函口訣)

注4

- ・冠状動脈硬化症や心臓性喘息のときに現われ、胸苦しく、呼吸困難、咳嗽痰があり、胸痛や背痛、心狭扼感を訴える場合に用いられる。

注5

- ・胸背痛、心下部疼痛、或は喘息短気咳唾
- ・肋間神経痛、肺炎、喘息、胃痛、胆石、狭心症

注6

- ・胸痛・肋間神経痛・胃酸過多症・減酸症、胆石症、膵臓炎等で胸部特に胸骨辺から心下部にかけて痛み背部に放散し、或は咳或は息切れがするもの
- ・感冒・気管支喘息・肺結核・湿性肋膜炎・縦隔膜腫瘍で咳嗽喀痰息切れ或は呼吸困難し冷え性或は胸背痛するもの
- ・肩こり・肩痛で寸脉沈遅尺脉小緊或は胸が塞りつまる感じや咳を伴うもの

注7

- ・狭心症の激症で、呼吸困難、胸背部の疼痛があるとき

注8

- ・心臓：心筋梗塞発作を起こしたことのある人

注9

- ・胸痺、喘息、咳唾し、胸背痛み、短気する証
- ・狭心証、及び其の類証
- ・心臓性喘息、及び其の類証

注10

- ・胸痺の病で喘息し、咳が出て、痰や唾を吐き、胸中や其のまうしろに當る背中に痛みを感じる者。

注11

- ・肋間神経痛、胃痛、胆石、狭心症、喘息、肺炎

注12

- ・狭心症、心筋梗塞：いちばんの目標は、胸板の裏側が痛むという症状。

処方番号：25A

処方名：栝楼薤白湯（かろうがいぱくとう）

処方構成：

栝楼仁 2、薤白 10、十薬 6、甘草 2、桂枝 4、防己 4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力に関わらず広く用いられる

効能・効果：

背部に放散する胸部・心下部の痛み、胸部の圧迫感

原典：細野方

出典：

解説：

『金匱要略』の瓜呂薤白白酒湯の白酒を去り十薬、甘草、桂枝、防己を加えたものである。軽症の狭心症に適用の機会がある。胸部の痛みを治す効果があり、肋間神経痛にも適用する。瓜呂薤白白酒湯と比較すると本処方の方が薬味が多く薬効もより穏やかであり、慢性的な胸部の疼痛に適応する。

25A.栝楼薤白湯

参考文献名	栝 楼 仁	薤 白	十 棗	甘 草	桂 枝	防 己	用法・用量
細野方	2	10	6	2	4	4	